とくしま

木育

ハンドブック

木とふれあい、木に学び、木でつながる

TOKUSHIMA MOKUIKU HANDBOOK

はじめに

― 木育活動からはじめるSDGs ―

森林は、水を育む、気候変動を緩和する、山地災害を防止するなどの様々な機能を持っており、持続可能な社会の実現（SDGs）に大きく貢献しています。

これらの機能を発揮させるには、森林の適切な整備と更新を進めていくことが重要ですが、そのためには、多くの方がさまざまな場面で木材を利用していく必要があります。

このため、徳島県では、「木材の良さ」や「利用の意義」を知っていただく「木育」活動を推進し、木材利用の促進に取り組んできました。

今回、「木育」活動について、「興味はあるけど、何から始めてみればいいのか･･･」というみなさまや取り組みを始めたばかりのみなさまに向けて、新たに「とくしま木育ハンドブック」を作成しました。

徳島の「森を知る」「木を知る」「森と木の仕事を学ぶ」という主に3つの観点から、森林や木材が我々の生活にいかに関わっているかを、より身近に感じていただけるような内容を盛り込んでいます。

「木育」には、決まったスタイルがあるわけではありません。一人ひとりが「木育」に関連する知識や技術を活かしながら行うものですが、みなさまそれぞれの「木育」活動の中で、本ハンドブックが少しでもお役に立てれば幸いです。

とくしまの木育

徳島県は県民が生活に必要なものとして、木の良さや利用することの意義を学ぶ活動を『木育』と定義し、その推進に努めています。

CONTENTS

はじめに

森を知る

森は水をつくり、空気をつくる 02

徳島の森林の特徴 ー 森の多様性について ー 04

木を知る

巨樹の多いまち、徳島 ー地域に育まれた巨樹・古木の魅力ー 06

木は人に優しく、優れた材料となる 08

森と木の仕事を学ぶ

林業 ー 山の仕事のさまざまなこと ー 10

製材と建築技術 ー 木を建材とし、家を建てる ー 12

木工 ー 徳島の木工の歴史 ー 14

樹木を知ろう

徳島の森をつくる樹木 16

森に出かけてみよう!

徳島県立 神山森林公園 イルローザの森 17

徳島県立 高丸山千年の森 18

木育体験

徳島木のおもちゃ美術館 19

県南部 那賀町の取り組み 20

県西部 三好市の取り組み 21

木育活動イベント

徳島県の主な木育イベント 22

とくしま木づかいアワードを受賞した木育活動 23

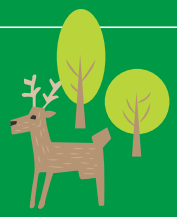
とくしま木育共同宣言 24

おわりに

※ 掲載している情報は2023年3月1日現在のものです

森を知る

森は水をつくり、空気をつくる



生物が生きるために必要な水と空気。それらと森林には密接な関係があります。森林に生える木々や落ち葉、土などがつながり、水の循環と空気を生み出しているのです。

地球は表面の約70%が水に覆われて「水の惑星」と呼ばれていますが、その97.5%が海水です。残りの2.5%が淡水となりますが、地表深くにある水や氷河、氷山に閉じ込められている水も含めますので、実際私たちが飲み水や生活に使うことができる水は約0.01～0.02%とほんの少し。本当に貴重で限られたものなのです。

●水循環のメカニズム

水の蒸発

海の水は水蒸気になり空へ上がります。そのほか、川、湖、そして陸地からも水が蒸発し、また森や林の樹木の葉からも水が蒸散※しています。

※蒸散…植物内の水分が、葉などから水蒸気として出されること。

雲ができる

水蒸気は上空の冷たい空気によって冷やされます。すると、空気中を漂う小さなほこりのつぶの周りに水蒸気が集まり、小さな雫になり、これがたくさん集まると、雲になります。

雨になる

小さな雲は、周りとくっつきながら、だんだん大きくなります。大きくなると重くなって、下に落ち始めます。これが雨です。

土を通って地下に、そして川に

山や大地に降った雨は土の中にしみこんでいきます。土の下には、砂や岩のかけらでできた層があり、その下にはもっと大きな岩石でできた層があります。しみこんだ雨はゆっくり移動し、大きな岩のすき間や割れ目を通って地下水となり、さらには、わき水になって出てきたり、井戸水としてくみ上げられたりします。地下水はやがて川や湖に入り、最後には海へ帰るのです。

森林に降った雨は地面に落ちる前に木の枝葉に当たるもの、下草に当たるものもあります。さらに落ち葉などが堆積してつくられた土が、水を吸収するため、降った雨は一気に河川などに流れることが抑制され、災害を防止する役目を担っているのです。

森林は木を含む植物が集まってできています。光合成によって温室効果ガスのひとつである二酸化炭素を吸収し、地球温暖化を抑える役割を果たしています。大気の環境を守るためにも、私たちは森林を大切にし、守る努力をしなければなりません。

Interview 01

正しい理解と管理が必要な森林の重要性

徳島大学大学院 准教授
田村 隆雄さん

徳島大学大学院社会産業理工学研究部准教授。森林の洪水低減機能に関する研究のほか、森林流域の水質保全機能、民官学の協働で取り組む災害（地震・津波、洪水）避難支援マップの作成などを研究。水の流れに関する研究だけでなく、地域が抱える防災や環境問題にも取り組んでいる。

人の生活環境に重要な森林の水質保全機能

身近でありながら意識されない森林の機能

森林には、生物多様性や地球環境の保全をはじめ、土砂災害の防止や水源のかん養、物質生産など、さまざまな機能があります。一つひとつが相互に影響を及ぼし合い、決して切り離すことはできません。しかし、それらの多面的機能は、あまり具体的に知られていないのではないでしょうか。たとえば“緑のダム”と呼ばれる洪水低減機能。森林に降った雨のうち約2割は、樹木の枝葉の上に溜まったり、枝葉に当たって細かく飛び散り上昇気流に乗って上空に戻ったりして地表に落ちてきません。残りは地表に落ちますが、森林の土はスポンジ状で隙間が多く、雨水を蓄える大きな力（保水力）を持っています。土の保水力を超えて地表に溢れ出た水も草木や落葉等の抵抗を受けてゆっくり川に流れ出ます。このため森林の有無や状態によって洪水の規模が大きく変わり、被害軽減や避難時間の確保にも関わってくるでしょう。洪水低減機能だけを見ても、私たちの生活環境に重要な存在である事実がわかります。

知識と体験から育む「守りたい」という気持ち

徳島は県土の約75%を森林が占める“森林県”です。しかも、その大半はスギ・ヒノキの人工林であり、適切に管理されなければ少しずつ荒廃していきます。かつて徳島でも、明治維新後の乱伐などによってハゲ山が各地に生まれ、洪水や渇水、土砂崩れに苦しんだ地域がありました。現在は植林が進み、森林が復活したかのように見えますが、洪水低減機能や水源かん養機能まで回復しているとは限りません。なぜなら、森林を支える軟らかな土は、何百年もかけてつくられたものだからです。厚さ1cmの再生には、およそ100年が必要になるというデータもあります。森林の重要性を理解するには、こうした知識に加えて、実際に足を運ぶ経験も大切です。近年では私有林を開放し、体験ツアーが開催される事例も出てきました。まずは森林のすばらしさを肌で感じてみてください。そこから「もっと知りたい」「守りたい」という気持ちが育まれるのではないでしょうか。

森を知る

徳島の森林の特徴 ― 森の多様性について ―

徳島の森林について

吉野川の北岸は降水量が少ないのに加え、阿讃（あさん）山脈の痩せた地質構造により土壌が発達しなかったことから、マツや低木広葉樹が生育していました。さらに、鳴門の製塩や和三盆の製造で乱伐が進んだとも言われています。一方で、吉野川南岸から剣山の周辺地域にかけては全国有数の多雨地帯です。高温多雨の気候と地質から、肥沃な土地が形成され、古い時代から天然性のモミやツガ、スギを中心とした針葉樹と広葉樹が繁殖してきました。

1962年 穴吹町　写真提供：杉山宰氏

スギは水を好む植物で、土壌水分ばかりでなく空中湿度にも深く関わり、霧が立つところでよく育つと言われているよ。

スギ林が広がる徳島

徳島県の吉野川南岸から剣山周辺は全国有数の多雨地域で、もともとスギの生育の適地でした。加えて、人々の暮らしに関わりながらスギ林は拡大しています。例えば、那賀町では焼畑の後にスギが植えられていました。また、広葉樹の木炭生産が盛んだった吉野川流域の美馬や三好では、伐採後にミツマタやタバコが栽培され、最後にスギが植えられていたようです。

column

どんぐりの戦略

動物と違い、生えた場所から移動のできない樹木。彼らは種を作り、風や重力、昆虫や動物の力を借りて種を移動させ繁殖しています。その中でもどんぐりは木から落ちたあと、ねずみや鳥などの小動物に運ばれて貯蔵されます。実は、ブナ科の木には豊作年と凶作年があり、それがブナ科の生存戦略につながっています。豊作年の直後にはネズミの栄養状態がよくたくさんの子が生まれますが、凶作シーズンには餌不足で死んでしまい、食べ残されたどんぐりはその命を繋ぎます。

引用・参考文献「人と生態系のダイナミクス②森林の歴史と未来」朝倉書店（2019.12）

一年を通して多彩なプログラムを開催

「徳島県立 高丸山（たかまるやま）千年の森」は、上勝町の一番西の端っこにある標高1,438mの高丸山をフィールドに、“森に親しみ、森を育て、森に学ぶ”をテーマに、「森林環境教育」「県民参加の森づくり活動」「森づくりを通した多様な交流」を行っています。標高1,000mにある駐車場までは車で行くことができます。そこから登って、山頂へは片道約1時間くらいです。見晴らしのいい山頂付近では、春になるとアケボノツツジやミツバツツジなど、ツツジの類がたくさん咲きます。登山者がよく来る山で、プログラムとしては春と秋に高丸山ガイド登山をしています。

Interview 02

世代を越えて受け継がれる千年の森を目指して

山の中腹にはブナの自然林があり、ブナをはじめ、クリやトチなどいろいろな広葉樹があります。そこでは森の保護活動を行っています。野鳥もヤマガラ、コゲラ、オオルリなど多くの種類がいるので、野鳥観察会といったさまざまな行事を、年間を通して開催しています。

なかでもツリーイング体験（別の場所で開催）は、木に登ることで「こんなに枝ぶりが凄いんだ、こんな高いところに枝があるんだ、鳥がやってきた」など、木に対しての新しい感覚を体験できると思います。5歳から参加できる楽しい体験です。

日々の暮らしと森をつなぐ取り組み

上勝には17年くらいいるので、山とか森はもう暮らしの一部ですね。私の拠り所になっているというか、森づくりをしているところの風景とか目をつぶると常に思い浮かびます。

徳島県は自然が豊かなんです。だけど歩いて道端の花を見るというよりは、通り過ぎちゃう車社会なので、自然に意識を向けにくいと思います。だからこそ、森に来て、植物や野鳥に興味を持ってもらえるように、引き続き活動していきたいです。

そして来てくれた人が「いいところだったよ、ここ！」って人を連れて来てくれたり、森から交流が広がったりすればいいなと思います。で、さらに「森づくりをしてみよう」とか、「森を守りたい」につながればいいと思います。

「秋の森遊び」でガイドを行う原田さん

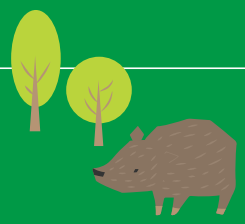
一般社団法人
かみかつ里山倶楽部
事務局長補佐

原田 寿賀子さん

大阪府出身。高校卒業後、約10年間の会社勤務ののち、環境問題に関心を持ち、作家C.W.ニコルが名誉校長を務めていた『東京環境工科専門学校』に入学。卒業後、緑のふるさと協力隊として上勝町に赴任したのが縁で現在の職場に就職。以降、木育や森づくりに携わる。

木を知る

巨樹の多いまち、徳島
― 地域に育まれた巨樹・古木の魅力 ―



地面から1.3mの高さの幹周りが3m以上ある大木を“巨樹”と呼びます。徳島県には多数の巨樹が点在しています。

ただ同じ巨樹といっても、その大きさ、形、佇まいは異なるもの。それは人間と同じ、それぞれに歩んできた人生ならぬ“木生”が違うから。徳島の巨樹たちの歴史に思いを馳せ、その木に手をかざしてみましょう。これらの巨樹たちがパワースポットとして人を惹きつけるのは、何百年とその場所にとどまり、地域とともに呼吸をし、歴史を重ねてきたからなのかもしれません。

今回注目したのは、国指定天然記念物の「加茂の大クス」。徳島県指定天然記念物の「壇の大クス」「大久保の乳イチョウ」。ぜひ実際に訪れて、その木が重ねてきた年月やその背景にいる人々の存在に思いを巡らせてみませんか。

加茂の大クス
（三好郡東みよし町加茂）

国指定特別天然記念物

全国に10本しかない特別天然記念物となっている巨樹の1つ。推定樹齢1000年以上の老大樹です。旧若宮神社の社地跡にあり、源平の頃よりその歴史を歩んできました。樹高26m、幹囲16.72m、枝張・東西52m、南北42m。“雄大さや美しさは日本一”と言われるほどの美しい樹形を誇っています。すべての方向にほぼ均等に広がっているその枝張りを注目して見てみてください。

壇の大クス
（吉野川市鴨島町森藤）

徳島県指定天然記念物

徳島県指定天然記念物。推定樹齢950年以上。徳島県では3番目の大きさを誇り、横に張り出す太い枝に凄みを感じる巨樹です。平安時代末期に後白河法皇に仕えた平康頼が1186年（文治2年）に阿波国麻植保司として赴任し、植えたとされています。2009年に弱っていたところを治療し、現在は元気に若い枝が上に伸び生命力が感じられます。

大久保の乳イチョウ
（名西郡神山町神領西大久保）

神山町指定天然記念物

推定樹齢500年以上。神山町指定天然記念物。その形が人や動物の乳房が垂れた形に似ていることから“乳イチョウ”と呼ばれ、古くから乳を病む人や産後母乳の出が悪い女性たちにご利益があると信じられていました。また昭和のはじめ、大阪の木材屋が乳（乳柱）を数本伐り、馬車で徳島市の中洲港へ運んだところ馬が腹痛を起こしたため、祟りだと騒ぎ4〜5本の乳を返してきたという逸話があります。

Interview 03

時間を重ねた大きさに圧倒される巨樹の魅力

徳島大学 准教授
佐藤 征弥さん

徳島大学生物資源産業学部准教授・理学博士。専門分野は生物学。1985年東北大学卒、1990年東北大学大学院博士後期課程修了。筑波大学第2事務区文部技官、農業生物資源研究所COE非常勤研究員などを経て、1995年より徳島大学に在籍。

県指定天然記念物「桑平のトチノキ」

地域の人々の信仰心が守り育ててきた存在

人は昔から見上げるような自然の存在に畏敬の念を感じてきました。何百年もの歳月を経て成長した巨樹は、象や鯨を超える大きさとなります。いわば、地球上で最大級のサイズを持つ生物なのです。その多くは長寿のシンボルとして崇拝の対象となり、地域の人々の強い信仰心のもと、大切に守られてきました。参拝した寺院や神社の境内で、御神木として見かける人もいらっしゃるでしょう。1913年（大正2年）に大日本山林会が発行した日本初の樹木データベース『大日本老樹名木誌』には、古来より常盤木として尊崇されてきたマツを筆頭に、全国各地のスギ、クスノキ、ケヤキ、サクラ、イチョウなどの老樹・名木が掲載されています。宗教観に左右されるためか、寺院にはサクラが多く、神社ではクスノキが見られる割合の多い点は興味深いですね。また、特に大きく成長するスギ、イチョウ、クスノキ、ケヤキは“四天王樹”と呼ばれており、県内各所でこれらの巨樹と出会う機会があると思います。

未来へと受け継ぐために私たちにできること

徳島には数多くの巨樹が点在していますが、一つとして同じものはありません。それぞれ受ける印象も異なりますし、重ねてきた歴史も違います。共通する魅力は圧倒的な存在感くらいでしょうか。例えば、美馬郡つるぎ町の“桑平のトチノキ”は、見事な枝ぶりが絵になる巨樹。新緑の季節には特に美しい姿を見せてくれます。美馬市の郡里廃寺（こおざとはいじ）跡にある“中山路のイチョウ”は、国内で一、二を争う立派な雌のイチョウで、地名が「銀杏木（いちょうぎ）」になったほど。どちらも地域の人々から愛されている素晴らしい巨樹です。しかし、今まで数百年を生き抜いてきたからと言って、これから先も安泰かと言えば、決してそうではありません。台風や落雷、開発などで樹勢が衰え、樹木医の手当てによって生命力を回復した例も数多くあります。現代においては、巨樹を自然のままに放置しておくのは難しいでしょう。未来へと受け継いでいくため、しっかり守っていくべき存在でもあるのです。

木を知る

木は人に優しく、優れた材料となる

関連動画はコチラ

木の家に足を踏み入れたとき、人はその温かみや木の香りに心地良さや安らぎを感じます。そこには、木が持っている優れた性質の数々が関係しています。木がどういうところに優れているのか、その特長について紹介していきましょう。

Masataka Namazu

体に優しい

湿度

木材には空気中の湿度を調節する作用があります。空気中の湿度が高いと吸収し、湿度が低いと水分を放出します。このため、木を多く用いた家では部屋の湿度の変動は小さく快適に過ごすことができます。

温度

木材は細胞中に空気を含み、コンクリートや鉄と比べ高い断熱性をもっています。木に触れたとき、夏でも冬でもほど良い温度を感じられるのはそのせいです。

安全

木材はパイプ状の細胞がクッションのような役割をするので、大理石に比べて2〜3倍の衝撃を吸収すると言われています。木材をうまく使うことで、足腰への負担や転倒などによるけがの軽減にもつながります。

耳に優しい

木材には音（低い音〜高い音）を適度に吸収する性質があります。その結果、人の耳に心地良く感じさせてくれます。木材を使った部屋では音がいつまでも響かず、適度に反響するので、聞き取りやすいと言われています。

目に優しい

木材には目に有害な紫外線を吸収する作用があります。そのため、木材から反射される光にはほとんど紫外線が含まれないので、目に優しく不快なまぶしさなどを軽減してくれます。

心に優しい

樹木は「フィトンチッド」と言われる、揮発性の芳香物質を発散しています。これは木が害虫や病気から自身を守るために出しているのですが、人にはプラスに働くことがわかっています。森林浴で心も体もリフレッシュできるのはフィトンチッドのおかげなのです。

※参考資料「木材は人にやさしい」林野庁

Interview 04

その地域にあるものを使うということ

目に見えているものの その先に想いをはせる

『神山つなぐ公社』にいた時代に、集合住宅の建築プロジェクトに携わり、その大きな柱の一つが神山の木を使用するというものでした。プロジェクトを進めていく上で地域の木を使うということをどう伝えていくかが重要で、建築という大きな事業でやろうとしていることを町民や一般の人たちが“何をしているのかわからない”では悲しいと思ったんです。そのためにも私自身が知らなかった木のこともちゃんと理解する必要性を感じました。

木についての多くを学べたことで、幼いころから暮らし、仕事もしている神山で、見慣れていたはずの山の景色の見え方がガラリと変わりました。集合住宅建築に神山の木を使うという背景には、日本全国の山にも共通して言われていますが、伐採の適期になった木が手入れもされず放置されているという問題がありました。山の手入れが行き届かず、循環がうまくできていないのが原因か、鮎喰川の水量が明らかに減少していることにも気が付きました。昔の生き生きした川の姿ではなくなってしまったんですよね。

木の家の肌触りや香りを感じる

木は建材として強度、調湿性、消臭性、そして加工のしやすさなど優れた性質を持っています。また、呼吸する建材とも言われるように山や森林に生えている樹木はもちろんですが、家屋の建材となった木からも生命力や温かみを感じることができます。きちんと手入れをすれば、100年以上だって住める家の材料にもなります。

その建築設計工房 代表
赤尾 苑香さん

一級建築士。高校卒業後、インテリアの仕事に憧れて徳島県内の専門学校に進学。在学中に受けた授業をきっかけに設計のおもしろさに気付き、卒業後は設計事務所に就職。2015年、自身の事務所『その建築設計工房』を設立。その後一時事務所を休業し『神山つなぐ公社』在籍を経て、現在は事務所での活動を再開。

木の家づくりの現場を見学する子どもたち

集合住宅の建築プロジェクトでは、完成見学会を開催して、子どもから大人まで木の家のことを知ってもらう機会をつくりました。実際に足を踏み入れてもらうことで、足から伝わる木の感覚、香りなどを感じてもらいました。また、神山町が主催する町民が自分の町のことをもっと知ってもらうための「町民・町内バスツアー」で保育所や小学生の子どもたちに集合住宅を案内しました。木と人との関係で昔は当たり前だったことを今もできるようにする。知識だけではなく、実際に触れ、感じ、身近な存在として再認識してもらう。その地域にある木を使って家を建てる。それもひとつの木育の形ではないでしょうか。

森と木の仕事を学ぶ

林業
― 山の仕事のさまざまなこと ―

関連動画はコチラ

林業とは?

林業とは、木を育てて森を整備し、育った木を販売する仕事です。販売までには伐採や加工などの作業があります。また、伐採した後は苗木を植えて50年ほどの年月をかけてまた新しい木を育てます。森は、地面に雨を蓄えたり、植物の根が土を掴んで土砂崩れを防いだりするなどさまざまな働きがあり、それらの働きを守るのも、林業の役割の一部です。

林業の仕事の流れ

徳島の林業について

面積の4分の3が森林で、全国でも有数の森林エリアの徳島。古くから、林業が本県の基礎産業を支えてきました。人工林率は6割を超え、全国トップクラスを誇ります。しかし、木材価格の低迷や、担い手の高齢化が進み、森林の持つ機能低下が懸念され、このような問題の解決を目指すべく、徳島県では『とくしま林業アカデミー』を開講し、現場の即戦力を養成しています。

徳島、そして林業の世界に飛び込んで

林業の世界に入り、間もなく3年。『とくしま林業アカデミー』では多くのことを学べて資格も取得でき、県内各地のさまざまな林業事業体でインターンを経験できました。その中から、人と気候のあたたかさに魅かれて、海陽町に来ました。

私が勤めている海部森林組合は海陽町と牟岐町を主な活動エリアとしています。森林施業の仕事は大きく分けて「伐採搬出班」と「造林班」があり、私は今「造林班」に所属しています。造林班は、冬の間はチェーンソーを使っての切り捨て間伐作業や、地ごしらえをして鹿よけのネットを張り、木の若苗を植林します。夏は木を植えた植林地に生える草を刈る下刈りという作業を主に行っています。伐採搬出班は木の伐採を主に行い、架線や林業機械で搬出作業を行います。

山の仕事は確かに油断をすると危険なことも多いですが、それ以上に私は楽しさを感じています。なんといっても大きな木を伐り倒す緊張感や迫力はたまりません。そして、木を植えることは、未来の風景を思い描く、夢のある仕事だと思います。

木に触れ、木を感じ気付くこと

私が考える「木育」は木に触れる、木のぬくもりを感じる機会を増やすことです。山に来てもらって植林を体験してもらうのもいいですし、大きな木の生命力を感じてもらうのもいいと思います。そうすることで、山や森を見る目が変わり、今まではただの緑に見えていた山の風景にいろいろな木々があることに気付くとか、移り行く木々の彩りを感じるとか…。そうしたところから木や森への興味を持ってもらえたらいいなと思います。興味を持ったり感動したりする要素はその人それぞれでしょうし、それを聞くのも楽しいですよね。

「私は山のこういうところが好きなんだけど、あなたは？」って話せる仲間が周りに増えてくれれば素敵ですよね。私もこれからもっと山の仕事にワクワクを感じ、多くのことを山から学び、伝えていければと思っています。

Interview 05

大好きな山が仕事のフィールドに

海部森林組合 作業員

相原 佑子さん

大阪府出身。自然や山、生き物が好きで、農業にも関心があった子ども時代。林業にも憧れはあったが、林業への仕事の就き方などがわからず、大学に進学し、卒業後は有機農業の道に進む。その後転機を迎えたときに『とくしま林業アカデミー』の存在を知り、第5期生として入学。卒業後は同組合に就職し、山の仕事に携わっている。

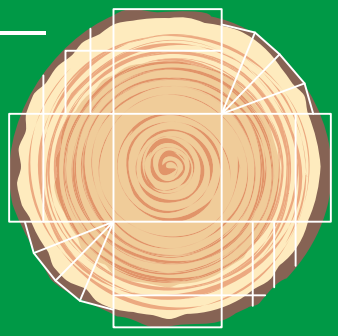
若苗を鹿から守るためのネット張り

森と木の仕事を学ぶ

製材と建築技術
— 木を建材とし、家を建てる —

関連動画はコチラ

原木から木材ができるまで



● 製材の工程

原木 ▶ ①皮はぎ ▶ ②木取り ▶ ③製材 ▶ ④乾燥

❶用途に合わせて原木を選定し、丸太の皮を専用の機械ではぎとります。木の種類によっては人の手で皮はぎをすることもあります。

❷柱や梁、板材など、1本の丸太から無駄なく木材を切り取るために、どのようにノコギリを入れていくかを決めます。木取りの良し悪しで木材の品質が左右される大切な作業です。

❸木取り図に沿って丸太をひいていきます。

❹木材の割れや収縮、曲がりなどを防ぐために乾燥させます。乾燥期間は木の種類により異なります。

木材には丸太から切り出したまま柱や梁、板などの形に製材した「無垢（むく）材」、複数の板を同一繊維方向に張り合わせ、強度と安定性がある「集成材」、原木を薄くむいたベニヤに接着剤を塗布し木目が交差するように張り合わせた「合板」などがあるよ。それぞれ用途に合わせて使い分けられているんだ！

大工の手仕事 継手

木造建築に用いられてきた大工の手仕事に「継手」と呼ばれる技法があります。ノミなどの手工具を使って、木材に加工を施すことで、釘や接着剤を使うことなく強固かつ美しく木を組み合わせることができます。主な継手の技法を紹介しましょう。

● 追掛大栓継（おっかけだいせんつぎ）

上木、下木のすべり込み部分にすべり勾配を持たせて二つの木材を引き寄せ、胴付き部分が密着するように大栓を用いる継手です。

● 金輪継（かなわつぎ）

同形の両部材の口にT字形の目違いをつけて組み合わせ、栓を差して固定したもの。伝統的継手の中でも強固な継手です。

● 腰掛蟻継（こしかけありつぎ）

腰掛けに蟻の形のような突出部を作り、ほかの木材の端に同形の穴を彫ってふたつを接合する方法。主に土台、母屋などの継手として多く用います。

● 腰掛鎌継（こしかけかまつぎ）

男木の頭の形状が「蛇の鎌首」に似ているところから名前が付いた継手で、蟻継よりも、引張力に対抗できるように考案されました。

Interview 06

大工の手仕事で木を使い、家を建てる

山田工務店 代表取締役社長
山田 文夫さん

父親が大工だったこともあり、大工の手仕事が当たり前だった環境で育つ。「大工さんが丁寧につくる木の家」をモットーに、職人を社員として雇用し、大工の育成や技術の継承に力を注ぐ。『(一社) 徳島県木の家地域協議会』理事、『とくしま木質化木造化推進協議会』副会長を務める。

「くむんだー」を体験し、
くさびを打ち込む子ども

木の家をつくり続けるためにできること

木にはたくさんの良さがあります。調湿性や消臭性、傷がついても直せる。そして建材として使い道がなくなっても、燃料やウッドチップとして利用できる。木は無駄にするところがないんです。木の家を建てたいという施主さんは多いですが、その中で「外国産の木ではなく国産の木を使ってください」とか「マツではなくスギを使ってください」という要望はほとんどないのが現状です。木の種類を選べるっていう認識がないのかもしれませんね。家づくりを通して一般の人にもっと木のことを伝える必要性を感じています。

私たちの業界や、大工の世界でも高齢化や、担い手不足が深刻です。特に昔ながらの“手仕事”ができる職人が減ってきています。いかにして若い世代の担い手を見つけていくかも重要ですが、技術の継承をしていくにはその技術をもっている人が現役でいる間だけなので、もうあまり時間は残されていません。『徳島県木造住宅推進協議会』が担い手育成の必要性を理解し、費用も負担してくれているのでそれらを活用しながらコツコツと担い手育成を進めるしかないですね。

遊びを通じて子どもたちが木にふれ合う機会を

『全国「くむんだー」木のジャングルジム協会』に加盟して、子どもを対象とした木育活動を行っています。「くむんだー」とは、国産材、地域の木材でできた柱や横材を木槌とくさびを使ってジャングルジムを組み上げて楽しむ木育玩具です。ジャングルジムとして遊ぶことより、組んでいく、そしてばらしていく工程に関心を持ってもらうことが大きな目的のひとつです。最初はぐらぐらしていた木材がくさびを打ち込むとしっかり固定できる。木の特長や組み立ての原理もわかるし、子どもたちもそこが楽しくて一生懸命やっていますね。

子どものときから木とふれあう機会が減ってしまうと、子どもたちにとって木は身近なものではなくなってしまうかもしれません。そして、木に携わる人がなにもしなければ生活の中から本当の木がなくなるかもしれません。家の建材として木を好まない人にまで無理に勧める気はもちろんありませんが、未来のためにも木の良さのPRは続けていきたいと思っています。

森と木の仕事を学ぶ

木工 ― 徳島の木工の歴史 ―

徳島市の木工のルーツは水軍にあった!?

徳島市東部の渭東（いとう）地区は、「木工の町」として知られています。実は、その歴史は江戸時代の徳島藩水軍の船大工から受け継がれたものなんです。

1585年（天正13年）から阿波国を治めるようになった大名・蜂須賀家。当初は水軍を持っていなかったものの、広大な海域を有する阿波を統治するにあたり、水軍の必要性が増します。当時、強力な水軍を率いていた森家を傘下に収めて水軍の整備を進めます。

そして、江戸時代の初め、1640年（寛永17年）頃に、徳島藩の水軍は現在の徳島市安宅（あたけ）に基地を構えます。かつて、阿波では水軍を“安宅”と呼んでいたことから現在の地名が誕生したのです。

基地の南側には約50人もの船大工の屋敷が設けられ、藩船の修理や新造に当たりました。当時、船の新造は外注する藩が多かったにも関わらず、徳島では優れた技術を身に付けた船大工たちが自前でつくっていました。

船大工たちは藩から給料を支給されていましたが、それは十分ではなかったようです。そこで、船材の残りを引き取り、ちり取りなどの生活用品を作って販売していました。その木製品は“安宅物”と呼ばれて城下町の人に親しまれていました。

1871年（明治4年）に廃藩置県によって徳島藩水軍は解体され、船大工たちは仕事を失ってしまいます。しかし、これは彼らにとっては好機となりました。彼らはこれまで以上に自らの技術を磨き、脱穀機などの農具から下駄や箪笥（たんす）、鏡台や建具、仏壇などを製作し、各地に販売したのです。これが原点となり、明治時代以降もさまざまな木製品が作られ、中でも鏡台や箪笥、仏壇は全国的にも有名になりました。その技術は、時代に対応しながら今もなお脈々と受け継がれています。

監修：徳島市立徳島城博物館館長 根津寿夫

徳島藩蜂須賀家の海の参勤交代を描いた『徳島藩参勤交代渡海図屏風』（出船）。蓮花寺蔵、徳島市指定文化財。

卓越した技術で栄えた木工の町

徳島藩水軍の船大工たちが集まり、木工業が栄えたのが徳島市福島を含めた渭東地区です。自分が子どものころは材木屋さんも何軒かありましたし、木工所もたくさんあったんですよ。それが今ではほとんどなくなってしまいました。

船大工は藩船の修繕や新造の技術を持つだけでなく、船材の端材を用いた生活用品の製作技術も高かったそうです。廃藩置県によって徳島藩水軍が解体され、これまで以上に自らの技術を生かして水車や脱穀機などの農機具や生活用品を製作して各地に販売したのが、私たちのルーツになります。大昔のことはわからないですが、釘や接合具を使わない“指物（さしもの）”という技術を駆使し、木と向き合い、製品を作っているのがたまらなく楽しく、時間を忘れて没頭してしまったときが自身の先祖を感じる瞬間ですね。

木は人にとって身近にある当たり前のもの

人は潜在的に木が好きなんだと思います。「木はいいよね、なんか落ち着くよね」と、ほとんどの人が感じている。その中で、これから自分たちがさらに何をどう伝えていくべきなのか。進化した使い方を模索するのか、木が本来持っている良さをもっと掘り下げるのか…。

私たちが生活している身の回りには、“木目調”で本当の木ではないものも溢れていますよね。それをなにも知らない子どもが“木”と思ってしまうかもしれない。その業界を否定するつもりはありませんが、本物の木についてのPRや啓蒙をしたいと常に思っています。

木工業の未来を考えるならば、業界のイメージを変えることも大事。楽しくできて収入があり、やりがいもあるんだったら、若い世代も関心を持ってくれると思いませんか。木工業を希望のある輝いた業界にすることが、今携わっている私たち世代の使命です。これからの木を取り巻く環境には大きな変化が起こると感じています。まだ答えは出ていませんが、木のことを正しく発信する人の存在が大事ですし、そのためにも若者への技術の指導や思いを伝えることを通じて「木の業界は楽しく、希望に満ち溢れている」イズムを叩き込んでいこうと考えています。

Interview 07

木工業の歴史を継ぎ、次代につなぐ

富永ジョイナー有限会社専務

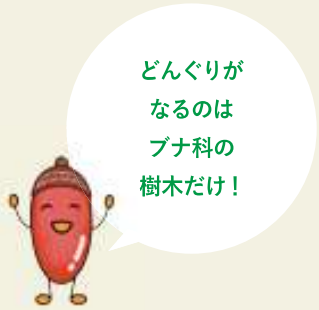
富永 康介さん

大学卒業後、東京と長野の木工の専門学校で修業を積む。東日本大震災をきっかけに徳島での家業について考えるようになり帰郷を決意。徳島ではさまざまな出会いがあり、指物師の仕事のほかに木育や若者への指導にも取り組んでいる。

工房で制作活動を行う富永さん

樹木を知ろう

徳島の森をつくる樹木



徳島では古くから植林が盛んだったことから、スギ・ヒノキなどの人工林の割合が高く、特にスギが占める割合は全国1位です。徳島の山にはスギやヒノキ以外にも、さまざまな樹木が植わっています。これらの樹木は大きく針葉樹と広葉樹の2つに分類することができます。

針葉樹は文字通り、針のように細く尖った葉が一般的で、樹形はまっすぐ上に育つため、加工がしやすく建具や構造材に多用されます。一方、広葉樹は広く平たい葉が特徴で、枝分かれしながら横に広がるように育ちます。針葉樹と比べて重くて堅いものが多いため、その性質を利用して家具や内装材によく使われています。

また、針葉樹は一年を通して葉を落とさない常緑樹が多いのに比べ、広葉樹は常緑樹のほか秋になると葉を落とす落葉樹も数多くあります。

徳島の代表的な針葉樹と広葉樹

針葉樹の葉　針のように細く尖った形状が多い

常緑針葉樹…スギ、ヒノキ、アカマツ など

広葉樹の葉　広くて平べったい形状が多い

常緑広葉樹…シイ、カシ、タブ、ヤマモモ など

落葉広葉樹…ブナ、サクラ、ケヤキ、コナラ、クヌギ など

一般的な針葉樹と広葉樹の違いを見てみよう!

※イラストはイメージです。

森に出かけてみよう!

徳島県立神山森林公園 イルローザの森

徳島市と神山町にまたがる西龍王山の豊かな自然林を利用した森林公園。サクラやモミジ、ツツジなど、約200種の樹木が生育しています。

神山町の豊かな自然林を利用し、森林とのふれあいを通して、森林や林業に対する理解醸成を図る『徳島県立神山森林公園イルローザの森』。約281ha（甲子園球場約73個分）の広大な敷地では、四季折々の豊かな風景を楽しめる散策路や思わず駆け回りたくなる芝生広場、木製アスレチックやサザンカの生垣迷路など、子どもから大人まで一日中楽しむことができます。また、森林学習館や野鳥観察施設などの施設をはじめ、園内各所に展望広場があり、天気が良い日は剣山などの美しい山々を眺望できる、徳島随一の家族向け森林浴スポットです。

何種類の木を見つけることができるかな？

代表的な樹種

［落葉広葉樹］	［常緑広葉樹］	［常緑針葉樹］
サクラ、モミジ、コナラ、クヌギ、ケヤキ、ツツジ	サザンカ、ツバキ、シイ、カシ	スギ、ヒノキ、アカマツ、ツガ、スイショウ

森林公園では緑と触れ合いながら楽しめるスポット満載!

春には山ザクラ、秋にはイロハモミジなど、四季折々の景観を楽しむことができます。園内の木々や草花を楽しむウォーキングイベントは、毎年参加する人も多い恒例イベントです。

サザンカの木でつくられた生垣の迷路は大人にも大人気。秋から冬にかけて香りのよい大きな花を咲かせたサザンカを楽しむことができます。

木のおもちゃで遊べる木育ひろば（2カ所）をはじめ、ネイチャーゲームや木工体験を通して、森林や林業に親しんでもらうイベントを毎月開催しています。

DATA

名西郡神山町阿野字大地459-1　TEL.088-678-0114
休／12月28日～1月4日
営業時間／9:00～17:00（11月～3月は9:00～16:00）
料金／無料

森に出かけてみよう!

徳島県立高丸山千年の森

那賀町と上勝町の境にある標高1,438mの高丸山を拠点に、「森に親しみ・森を育て・森に学ぶ」さまざまな体験活動を行っています。

今もなお豊かなブナ自然林が残るこの森は徳島県自然環境保全地域第1号に指定されており、「世代を越えて森づくりを長く続けよう」という思いから『高丸山千年の森』と名付けられ、森と人をつなぐ交流拠点になっています。上勝産のスギで造られた「千年の森ふれあい館」では森林について深く学ぶことができる講座や、木工体験を開催しています。また、四季を彩る高丸山を満喫できる「ガイド登山」や親子で森の活動を体験する「森あそび」、木の枝にロープをかけて登る「ツリーイング体験」などの人気イベントも充実しています。

貴重な
自然林を
見に行こう！

代表的な樹種

［落葉広葉樹］
ブナ、トチノキ、カツラ、ミズキ、ヒメシャラ、ケヤキ、イヌシデ、カエデ類

［常緑広葉樹］
ツルシキミ、アセビ、ソヨゴ

［常緑針葉樹］
スギ、ヒノキ、ツガ、モミ

高丸山千年の森をフィールドにした人気アクティビティ!

高丸山では、ブナの自然林再生を目標に、植樹から育林と、県民参加で広葉樹の森づくりを行っています。2004年（平成16年）から、県内の企業やNPO法人などの29のボランティアグループが、森づくりの担当区画を持ち、草刈りや木を伐るなどの森づくり活動を継続して行っています。最近では、親子で木を伐る体験や、森の香り探し、小枝を使ったクラフトづくりなどのイベントも行っています。

高丸山に生息している多様な生物や美しい植物を、ガイドの解説を聞きながら散策する「高丸山ガイド登山」。春の新緑や秋の紅葉など、四季を通じて森や木、虫や鳥など、何気なく見ていた自然の中に、新しい世界を見つけることができます。

自然や森林とのふれあいをテーマにしたイベントを定期的に開催しています。館内にはすぎの子木育広場やカフェコーナーもあり、おすすめの立ち寄りスポットです。

DATA

勝浦郡上勝町大字旭字中村66-1　TEL. 0885-44-6680
休／水曜（祝日の場合開館、翌日休館）、12/28～1/4
営業時間／8:30～18:00（利用申請があれば7:00～22:00）
料金／無料

木育体験

徳島木のおもちゃ美術館

「0歳から100歳まで楽しめる」全国で唯一の県立おもちゃ美術館。
徳島の自然や伝統文化と遊びが融合した体感型木育ミュージアムです。

『徳島木のおもちゃ美術館』は、緑に囲まれた大型公園『あすたむらんど徳島』内に2021年（令和3年）10月オープンしました。館内は見渡す限り木で造られており、使用されている木材の、実に約99%は県産材です。徳島の自然風景を表現した「里山ひろば」では、徳島のランドマーク「眉山」や5万個の木のたまごで満たした「吉野川」など、徳島すぎをふんだんに使用した木質空間が広がっています。また、館内には300点以上の木のおもちゃを取りそろえており、赤いエプロンを着た「おもちゃ学芸員」がおもちゃと遊びを通じて、徳島県の森林や林業のこと、そして木の伝統文化を来館者へ伝えてくれます。遊びながら木が持つ魅力や温もりを五感で味わい学ぶことができる、まさに徳島が誇る「木育」おもちゃ美術館です。

観覧車状の木製からくり「山の仕事」は、山で切られた木がおもちゃに変わるまでの工程（伐採→運搬→製材→加工→玩具）を表現しています。小さな子どもたちにも山の仕事に興味を持ってもらい、からくりを通して森の循環を分かりやすく伝えています。

『あすたむらんど徳島』正面入り口に、木々を潜り抜けて美術館に続く「木育のこみち」があります。新緑・紅葉・落葉など、季節の移ろいを感じることができます。落ち葉や木の実を拾い集めた自然観察イベントも定期的に開催しています。

徳島に数多く残る農村舞台をモチーフにした「あさん農村舞台」では、徳島すぎで作られた積み木で遊ぶことができます。また、徳島を代表する伝統芸能「阿波人形浄瑠璃」の公演が行われたり、伝統工芸品でもある三段重ねの木製お弁当箱「遊山箱」で遊べるコーナーも用意されています。

館内には世界最大の遊山箱や、藍で染めたもの、伝統技術・阿波指物の技の粋を集めたものなど、多種多彩な遊山箱が展示されています。

DATA

板野郡板野町那東字キビガ谷45-22（あすたむらんど徳島内）
TEL.088-672-1122　休／水曜　※祝日の場合は営業、翌日休館
開館時間／9:30～16:30（7、8月は～17:30）
料金／一般800円、小中学生300円、小学生未満無料
駐車場／無料（1,300台共有）

木育体験

町全体で木育体験ができるのは、県南部の那賀町

那賀町は面積の9割以上が森林、県内でも高樹齢、大径木のスギに恵まれ、地場産業として林業が栄えてきました。また、自然を舞台にした観光スポットも多く、近年ドローン特区に認定されるなどユニークな取り組みも。2017年（平成29年）に木育を推進するウッドスタート宣言をし、木育円卓会議、木育サミットなどを経て、県内2番目の“おもちゃ美術館”が2023年（令和5年）にオープンしました。

那賀町 山のおもちゃ美術館

那賀町の山をイメージし、中二階など高低差をつけた立体的な館内。内装や什器（じゅうき）には那賀町産材がふんだんに使われています。全国の人気のおもちゃをはじめ、館内全体は木の遊具を使った壮大なごっこ遊び空間となり、楽しみながら木の良さを体感できるしかけが満載です。

DATA

那賀郡那賀町横石字大板35　TEL.0884-63-8110
休／月曜（祝日の場合は開館、翌日休）、12/27～1/1
開館時間／9:30～16:30(7/1～8/31は、～17:00)
料金／大人700円、子ども（中学生以下）300円、未就学児 無料
※那賀町民は半額（小学生以下は無料）※お得な年間券も販売中

木頭柚子はもちろん、相生名産の晩茶にちなんだ茶摘みごっこができるコーナーも。“那賀町ならでは”が、木のおもちゃで満喫できます。

相生森林文化公園 あいあいらんど

豊かな森林に囲まれ、園内からはあじさい湖が臨めるキャンプサイト・コテージ併設型の公園施設。宿泊だけでなく、広大な公園内では、多様な生態系を感じる樹木や植物、小鳥などの観察が楽しめます。さらに林間広場にある“森林工房”では、木製パズルなどの工作体験（有料でコテージ利用者のみ）もできます。

管理棟内には、小さいお子さんが安心して、木を感じながら遊べる木球プールがあります。

DATA

那賀郡那賀町横石字大板53-19　TEL.0884-62-3116
休／月曜（祝日の場合は開園、翌日休）、12/30～1/1
営業時間／9:00～17:00 料金／園内散策および駐車場利用は無料
※宿泊については、ホームページを確認の上、お問い合わせをお願いします

木育エリアは拡大中！

今後、『那賀町山のおもちゃ美術館』の木育体験は屋内だけでなく、あいあいらんどとも連携し外遊びなども取り入れていきます。周辺一帯が広大な木育体験エリアになる予定です。

まだまだあります那賀町の木育 ～スポット＆トピック～

那賀町には、屋内施設、森林フィールドなど木育を体感できるスポットがたくさんあります。また、林業の町ということで、林業従事者、行政機関など、地域で盛り上げていく活動も多様です。

スポット

相生森林美術館

『那賀町山のおもちゃ美術館』に隣接し、こちらは30年続く町営の美術館。展覧形式で、木彫や木版画など木にこだわった作品が常設展示され、年間通して企画展も開催しています。2つの美術館を同時にめぐるのもおすすめです。

スポット

ファガスの森高城

ブナやシイ、ナラの巨樹が葉を茂らせる森の中、剣山スーパー林道沿いにある憩いスポット。那賀町の山を知り尽くす名物管理人“地下足袋王子”の山ガイドツアーが人気で、コテージやBBQスペースもあります。12月～3月は冬季休業。

トピック

那賀町は近年、森林のない町（北島町）と森林環境教育・木材利用促進に関する連携協定を結ぶなど、木育を通じた交流の輪づくりにも熱心に取り組んでいます。また地域の林業従事者の若手が集まる団体『山武者』は、林業の魅力を伝える「リアル林業体感3 DAYS」の運営や、地域のイベントを積極的にサポート。官民総出で、那賀町の林業、木育を発信しています。

2019年（令和元年）に実施された『北島町×那賀町木育ツアー』の様子。

県内でウッドスタート宣言しているもうひとつのエリアは、県西部の三好市

那賀町に続き、2019年（平成31年）にウッドスタート宣言をし、地元木材を使ったおもちゃ開発をスタートした三好市。初の木育キャラバンを開催後、2021年（令和3年）には待望の誕生祝い品おもちゃが完成。その後、保育園や児童発達支援センターなどに木のおもちゃを貸し出したり、木育インストラクター養成講座なども定期開催しています。

毎年5月頃、開催される『木育キャラバンin三好』。全国で人気の木のおもちゃが集まるだけでなく、市民によるワークショップや屋外ではフォレストアドベンチャー体験ができるなど、親子で夢中になれる企画が満載です。

三好市誕生祝い品『こだま～かずら～』。こだま（木霊）は三好市の森林ビジョンのテーマのひとつで、モチーフは名所“かずら橋”、シルエットは人気レジャーの“ラフトボート”に。いろいろな広葉樹の音色や香りが楽しめる、たたいて遊ぶおもちゃです。

木育活動イベント

徳島県の主な木育イベント

県内では木材関連団体を中心にさまざまな木育活動やイベントが実施されています。木の良さを体感し、日々の生活のヒントをもらえるきっかけづくりに、家族やお友だちと一緒にぜひ参加してみてください。ここでは、その一部を紹介します。

親子木工教室

夏休みを中心に開催 主催:徳島県木材買方協同組合

小学校や児童施設の要望に合わせ、公民館や屋外などで実施している35年以上も続く人気の親子木工教室。日頃、木材に触れる機会の少ない子どもたちが、目をキラキラさせながら木工工作にチャレンジする姿は微笑ましい木育の風景です。

児童木工工作『木とふれあうコンクール』も毎年開催。小学校から多くの応募があり、子どもたちの創造力があふれる力作ぞろいです。

少年少女里山マイスター養成講座

毎年10〜3月開催 主催:森の案内人ネットワーク

毎年人気の講座で、入田町の山人の森で小学生を対象に開催。森の観察から木登り、ロープワークまで、野山で体を動かしながら楽しむ活動を満喫できます。その他、門松づくり、薪割り&ピザづくりなど、文化や食にまつわる体験も。5〜10月には大人向けの講座もあり。

とくしま木づかいフェア&アワード

毎年10〜11月頃開催 主催:とくしま木づかい県民会議

毎年秋に『あすたむらんど徳島』で開催。定番の木製品の展示・販売からスタンプラリーまでさまざまなブースや企画が来場者を楽しませてくれます。また、トレンドに合わせたパネル展示やDIYやチェーンソー丸太切りなどの体験会もあり楽しく木育体験ができます。

『とくしま木づかいアワード』はデザイン・プロダクト・アクションの3部門で作品を募集。木材の魅力が引き出され、SDGsの視点も考慮された素晴らしい作品・アクションが多く集まり、木づかいフェアにて授賞者を発表します。

木でつくる手づくりおもちゃ展

毎年秋に10日間開催 主催:四国大学 生活科学部児童学科

同学科と『手作りおもちゃクラブ』が協力し製作した80種類の木のおもちゃと県産スギのブロックを、子どもたちに自由に遊んでほしいと『四国大学交流プラザ』で開催。利用は無料で、保育園、幼稚園の園外保育から一般の親子連れまで、毎年2000名ほどの利用があります。

とくしま木づかいアワードを受賞した木育活動

2019年準グランプリ入賞

WMICKS（ミックス）

木材関連産業が発展し、A材からD材※を余すことなく活用（カスケード）できる企業が集まる小松島市が、企業（ウッドファースト、ゲンボク、日新、N&E）と協同しスタートしたプロジェクト。同市役所のロビー木質化や、グッズ製作、イベントなどを企画し、積極的に活動中です。

「子どもたちの木工工作に使ってほしい」と、さまざまな材種の木切れを無料で配布する取り組みもしています。

※木材を品質や用途によって分類する名称

2022年グランプリ・2017年準グランプリ入賞

徳島県木の家づくり協会

親子で楽しめるスタンプラリー、徳島すぎの木工グッズづくりなど、徳島の木に触れて学べる企画が満載の「木の家のくらし相談フェア」を『徳島木のおもちゃ美術館』などで開催。木の家づくりから、耐震、移住、空き家のことまで幅広く住まいの相談にのってくれます。

大径化した徳島すぎを活用し、大学の駐輪設備を木質化。景観も魅力的で、今後販売も予定しています。

2022年準グランプリ入賞

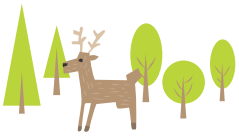
那賀高校 フォレストクラブ

森林クリエイト科の生徒が2022年（令和４年）に活動スタートしたクラブ。サステナブルな人と森との関係を創造していくために、授業では学べない社会コミュニケーション力アップや通常カリキュラム以外の林業関連の資格取得などを目指す。地域のイベントに参加し交流を深め、拝宮和紙の製作や木頭すぎの箸づくりなど地域の文化継承についても学んでいます。

グランプリはじめ、過去に6度入賞

城西高校神山校 森林女子部

2015年（平成27年）からスタートし、全国からも注目されている同校の部活動。名前にある森林、林業、木育の領域を超えて、地域（神山町）資源を活かしたものづくりに取り組んでいます。メンバー自身で山から木を伐りだし、製材・加工しながら、商品開発から販売まで行い、ときには木材以外の資源ともコラボするなど、学生ならではのアイデア商品をリリースしています。



とくしま木育共同宣言

「木とふれあい、木に学び、木でつながる」木育活動を通して、

1 森林と地球環境の保全につとめ、
持続可能な社会の実現を目指します

2 子どもたちの豊かな心、
感性と人間性を育む環境づくりを目指します

3 豊かな森林資源の有効利用を促進し、
地域活性化を目指します

4 素晴らしい木造伝統技術や木の文化を継承し、
これらに親しみ大切にする心を育てます

5 産学民官が連携して、
次世代の優れた人材を育てます

“木育” を中心とし、業種・地域・年齢などさまざまな枠を超えたアプローチや連携を取ることで、日本国内の森林が抱える課題解決に立ち向かい、国際社会においても責任を果たすべく、「とくしま木育共同宣言」ができました。

［木育共同宣言］は、2019年（平成31年）2月に開催された『第6回 木育サミットin徳島』からはじまり、「様々な業種・業界が木育によって繋がり合い、木育を通じて持続可能な社会の構築に貢献しようという意志を宣言するもの」で、約1100の企業・団体・個人が賛同しています。

おわりに

近年、地球規模で環境問題への関心が急速に高まりつつあり、このことは木育に想いを寄せる人の増加に関係していると考えられます。過去にさかのぼってみると、18世紀後半に産業革命がはじまって化石資源を大量生産して利用し、ものを大量消費する物質的に豊かな社会・時代に向かう転機となりました。

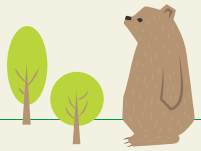
しかし、同時に、地球温暖化の原因となるCO_2などの温室効果ガスが発生、さらには大気汚染や水質汚濁、自然破壊にもつながりました。

現代に至っても化石資源の利用に伴う地球温暖化は続き、異常気象などにさらされていることが懸念され、温暖化は、気温、海水温、海水面水位の上昇、雪氷減少などの観測事実からも再確認されているところです。

このような中で、温室効果ガスを出さない再生可能エネルギーの活用とともに、光合成によるCO_2削減効果があると期待される森林の果たす役割が注目されています。また、森林による国土の保全、水源のかん養、土砂災害防止や土壌保全、生物多様性の保全、物質生産など多面的機能を発揮することも、国民生活及び国民経済に大きな貢献をしています。

徳島県では、県産材利用を促進するための普及啓発として、木育を推進することが重要な課題となっています。本ハンドブックの内容に触れていただくことによって、「とくしま木育」がさらに充実し、活発な活動が展開されることを心から願っています。

参考文献　「詳説世界史研究」木下康彦ら　山川出版社（1998）
「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)「第5次評価報告書」」　環境省（2014）



発行／徳島県農林水産部スマート林業課
企画・編集・制作／徳島県木材協同組合連合会・株式会社あわわ

とくしま

木育

ハンドブック

TOKUSHIMA MOKUIKU
HANDBOOK

2023.3